魔法少女リリカルなのはTriAccel

Force 20X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ

【Ｎコード】
Ｎ８１９４Ｒ

【作者名】
Ｆｏｒｃｅ　２０Ｘ

【あらすじ】
六課解散から2年後の新暦７７年。　２１歳になった高町なのはフェイト・Ｔ・ハラオウン　八神はやてやその他のメンバーはある理由から、クロノ・ハラオウンにより集められる。集められたメンバーはみんな顔見知りの人間ばかり。
ただその中に、たった一人見慣れない青年がいた。
その青年の名はクラウド・アユトーレ
その名を聞いて反応するなのは。
そして、新たに始まる事件。

過去と現在が交差し、物語は今、動き出す。

第3話　湖に吹く風（前書き）

フェイト　「辛い過去があるからこそ、今の自分がいる。それはきっと変わらない今もこれからも。これは誰であっても同じだと思う。だからきっと2人も…

魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。

第3話　湖に吹く風

僕は今、湖の前で横たわっていた。
風が気持ちよい。
「さて、これからどうしよ？」
考えたけどわからない。
「もう少し、寝よう…。」
僕は眠った。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「それじゃあ、なのは。早めに帰ってくるのよ。」
「はーい。」
私高町なのはは5歳。
お母さんに見送られて、元気に遊びに行きます。
「あっ、なのは。」
「おねーちゃん。行ってきます。」
「いってらしゃい。」
私はトタトタと走り出した。
「相変わらず、なのはは元気だな。」
「あっ、きょーちゃん。お父さんが退院してからなのは、ずっと元気だよね。」
「まぁ、元気なことは良いことだからな。さっ、練習の続きだ。」
「うん。」
そう、私達高町家のお父さん、高町士郎さんは少し前に事故にあって入院していて、最近ようやく退院してきました。
お父さんの入院時、お母さんとお姉ちゃんは喫茶店の仕事。
お兄ちゃんはお父さんに付き添っていて、私は最近まで1人でいることが多かったのです。
でも、退院後は普通の生活に戻って私は嬉しいです。

「那美さ～ん。」
「あっ、なのはちゃん。」
「こんにちは。」
八束神社の巫女さん、神咲那美さんに会いに来た。
「くーちゃんお借りしますね。」
「はーい♪」
「くぅぅぅん。」
「くーちゃん♪」
というわけで私はくーちゃんこと久遠と出掛けました。
「どこに行く？」
実は予定無しに外に遊びに出たので、特に行くとこが無く…。
「取り敢えず公園に行こうか？」
「くぅぅぅん♪」
と言うことで近くの公園に行くことに。
「気持ちいいね。」
「くぅぅぅん。」
「おっ、なのちゃん。」
風にあたってると聞き慣れてる声が、奥の方から聞こえた。
「晶ちゃん？どうしたの？」
家庭の事情で、私の家に居候している城島晶ちゃんがたっていた。
「桃子さんに頼まれて、お昼の買い出し。」
「お疲れさま。」
「おっ、きつね。お前もいたのか。」
「くぅん。」
「そっか。なのちゃんは今日、きつねと遊びに行くんだったっけ？」
「そうだよ。」
「くぅん。」
「そっか。うんじゃ気を付けて。」
「ハーイ。」
晶ちゃんと別れた私達は、少したってからまた散歩を始めた。

すると
「くぅん。」
「うん？どうしたの？」
「くうぅぅん。」
「ちょっと、くーちゃん！？」
突然くーちゃんが走り出して、私は追いかけなきゃいけなくなって、
そしたら森の中に入って…。
「待ってよ！」
どのくらい走ったかはわからないけど、かなり走った。
そして…
「あっ…。」
森を抜けた先には湖があった。
「こんなところに湖？」
「くぅん。」
「くーちゃん…？」
そこには1人の男の子が眠っていた。

（なんだかくすぐったいな。）
「うぅん…。」
「ひゃっ！！」
「目が覚めたら1人の女の子とそして一匹のきつねがいた。
「あ…、あの…。」
「すいません！」
いきなり謝られた。
「？　あの…。」
「はっ、はい。」
どうやら僕はこの子に恐怖心を与えてるようだ。
「君はこの町の子？」
「そうですが…。」

「もしよければ…、その…、この町の事を教えてくれないかな？」
「えっ？」
「この町の事、わからないんだ…。始めてくるから。」
「うん…。」
まだ怖がられてるな。
「あの…僕はクラウド・アユトーレ。　君は？」
「あっ…、なのは、高町なのはです。」
緩やかな風が吹く湖の辺りで僕とこの子、高町なのはさんは出会った。
この出会いが全ての始まりだったのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「へぇ、この町は広いんだね。」
「うん。」
「くうぅぅん。」
今、僕となのはさんは取り敢えず森を出て、この町の事を教えて貰うべくなのはさんときつねのくーちゃんと3人で海鳴の町を歩いている。
「クラウドくんは何処にすんでるの？」
「遠いところ。ごめんね、言えないんだ。」
このときからも僕はいろいろ隠さなければいけないんだ。
「親から許可は得たの？」
「…僕……、親がいないんだ。」
「あっ…。ごめん…。」
「いや、気にしないで。」
「くぅん…。」
「大丈夫だよ。久遠。」
「くぅん。」
「仲いいね。」
「久遠、いい子だね。」

「くうぅぅん♪」
確かに、久遠は自然と僕になついているな。
こうして、海鳴の町を回った。
そして夕方。
「じゃあね。」
「あの、最後にいいかな?。」
「何?」
あまり言いたくなかったけど、勇気を出して聞いてみた。
「この場所、教えてくれないかな?」
僕は一枚の紙を出してなのはさんに聞いた。
「どこ?住所が書いてあるあるけど。」
「僕の家の住所。ただ…どこかわからないんだ…。」
だんだん泣きそうになってくる。
「クラウドくん?」
なのはさんは心配してくれてる。
「僕、お父さんもお母さんも…ヒック…いなくて…ヒック…それで…。」
もう、感情のコントロールが出来ない。
「もういいよ。言わなくて。」
「ありがとう…。」
「クラウドくん、ちょっと待ってて。」
「えっ?」
なのはさんは誰かに連絡し始めた。

少したってなのはさんが
「もし良かったら、家に来ない?」
「いいんですか?」
「お母さんがいいって。ただ、お母さんも少し話が掴めないから話を聞かせてって。」

「…ありがとう。」
予想外だけどありがたかった。
という訳で、僕はなのはさんの家に行くことになった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「なのははまだか？」
「もうすぐ帰ってきますよ。」
だといいが。」
父親の士郎と母親の桃子がなのはの帰りを心配している。
すると
「ただいま。」
「おじゃまします。」
僕となのはさんは高町家に到着した。
「お帰りなさい。クラウドくん、今晩は。」
「今晩は…。」
「はじめまして。なのはの母の桃子です。」
「はじめまして。クラウド・アユトーレです。」
なのはさんのお母さん、若いな。
「さぁ、お腹空いてるでしょ。」
「うん。」
なのはさんは元気だな。
ちなみに久遠は、八束神社の巫女さん。確か、那美さんだったっけ？　に返してきた。
そして僕も、取り敢えずは落ち着いてきた。
「おっ、なのちゃんお帰り。」
「ただいま。蓮ちゃん。」
なのはさんは楽しそうにしていて、皆さんはあまり僕の事を気にしてないようだ。
そのあと僕を含めて全員で食事をして、今は桃子さんと士郎さんに自分の事を簡単に説明している。両親を亡くしていて、今は知り合いに預けられていること。

両親の立場が偉い方だったのが理由で僕が狙われてること。
　僕を守るために、預けられてる先のお母さんによって、ここに来たことを。
「そう…。大変だったわね。」
「いえ…。」
「わかったわ。クラウドくん、ここにいて良いわよ。」
「えっ？」
「そうだな。せっかくなのはとも知り合ったんだし。行き先が知らない事だらけよりいいよ。」
「いいんですか？」
「大歓迎よ。」
「あ、ありがとうございます。」
こうして、僕は高町家に居候することになってなのはさんのお兄さんから剣を教えてもらい、あっという間に４年がたった。

「そう…。出ていくのね。」
「はい。長い間お世話になりました。」
僕がこの家を出ることにしたのは僕の預かり先から呼び出しがあったから。
「何かあったらまた来てね。いつでも待ってるから。」
「ありがとうございます。それじゃあ、行きます。」
桃子さんの部屋を出るとなのはがいた。
「クーちゃん。」
完全に涙目になってる
「それはやめてって、いつも言ってるよね。きっとまた会えるよ。」
「うん…、そうだね…。」
「それじゃ。」
「うん…、またね…。」
僕は高町家を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「それから、今になって再会した訳。」
「そうだったんだ。」
私は、ある程度フェイトちゃんとはやてちゃんにクラウドの事を喋った。

皆が寝てるとき、私は
（きっとあの過去があるから今があるんだな。）
心でそう思った。

第3話　湖に吹く風（後書き）

最後らヘンが簡略されている事をここで謝らせていただきます。
すいません。
次は、ついにクラウドの戦闘能力が明らかに
お楽しみに

第４話　ファーストアタック（前書き）

なのは　「力。　きっとそれは力を交差させる事で強くなる。より強く、より正しい力を手に入れるために私達は戦う。
魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。」

第４話　ファーストアタック

「ふあぁ…。」
まだ眠いな…。
現在時刻０６時２５分。
＞おはよう。クラウド。＜
＞おはよう。＜
＞早いな。＜
＞早起きです♪＜
俺が念話である人物と会話してると
＞おはよう。＜
＞なのはか？＜
＞うん。＜
なのはが割り込みしてきた。
＞昨日はごめんね。クーちゃんて呼んで。＜
＞もう、やめろよ。＜
＞うん。じゃあ後で。＜
しかし、本当に昨日は疲れた…。ロビーに入ったら空気をぶち壊しちまうわ、過去を話さなきゃいけなくなるわ、なのはにクーちゃんと呼ばれるわと、本当に疲れた…。
「着替えっか…。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「うぅん…。なのは、起きてたの？」
「うん。」
「おはよう。なのはちゃん、フェイトちゃん。」
「おはよう。」
私がクラウドに謝った後に２人が起きた。
「何かやってたの？なのはちゃん？」
「昨日の事、クラウドに謝ってたの。クラウドの事、クーちゃんて

呼んじゃったから。」
「そっか。」
「それじゃ、着替えよ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
現在０８時００分
それぞれが、着替えて食事してと、一段落してロビーに集まった頃だ。
「おはよう。」
「おはようございます。」
ここの部隊長扱いのリンディ提督が来た。そしてここの部隊データを見せた。
「固くならなくていいわよ。みんな身内同然だし。」
確かにそうだな。
部隊データ見たけど
まず、ハラオウン家の人間が3人で、なのはの言う八神家が6人
そしてなのは。俺はハラオウン家に預けられてたから…そう考えると凄いなこの部隊。
「それじゃあ、この部隊の説明をします。クロノ。」
「わかりました。この部隊は…。」
長ったらしい。
ようは最近の事件の原因のロストロギア、通称ファントムコアの対策等がこの部隊設立の理由だそうだ。
「ねぇ、クロノ君。」
なのは、もう普通に読んでる！
「この部隊って…、機動六課のままだけど。」
「それは、この部隊設立が急な決定だったからよ。だから、コールサインとかも使い回しなんです。」
なるほど…
「ちなみに、クラウドはアクセル1、僕はアクセル2、部隊長はア

クセル3だから。」
「それじゃあ、解散ね。」
「はい。」
やっと終わった…。 萎えるよ本当…。

「ねぇ、クラウド。」
「おん？」
「模擬戦の相手、いい？」
「あっ、私もいい？」
フェイト割り込み。
「いいぜ。気分転換になるし。」
気晴らしいくぜ！！
「そう言えばなのは、フェイト。はやてがいなくねーか？」
「「お出掛け中。」」
2人で同じ事言いやがった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「はやて♪」
「カリム、ひさしぶりや。」
私、八神はやては今、聖王協会のカリムの所に来てます。
「リインは？」
「はやてちゃーん。」
「リイン♪」
「ありがとね。リインを貸してもらって。」
「別にええよ。」
実は、少し前にカリムにリインを貸していたのです。
「おかげで、仕事がはかどったわ。」
「エッヘンです～。」
なんて会話してたら、通信が入ってきた。
「はやて。」

「ヴィータ。どないしたん？」
「ヴィータちゃん、ひさしぶりです～。」
［おう。］
「で、どうしたん？」
［今からなのは達が模擬戦やるんだ。］
「ホンマか？ほなら今から戻るから、少し待っててって伝えて。」
［わかった。］
通信が切れた。
「ほならな、カリム。」
「うん。またね。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
現在昼過ぎ。
はやてが待っててと言われて、みんな待ちの状態。
「暇だな…。」
「暇だね…。」
「うん…。」
ガチで暇だ…。
と愚痴っていると
「ごめんな。」
「ただいまです～。」
「リイン、ひさしぶり♪」
「なのはさん、ひさしぶりです～。」
「あなたが、クラウドさんですね？」
このちっこいの、なんだ？
「私はリインフォース？です。よろしくです。」
「クラウド・アユトーレ。」
そうか、このちっこいのが八神家の7人目なのか。
「はやて、お帰り。」
「お帰りなさい。」
「シグナム、ヴィータ、ただいま。」

「ただいまです～。」
なんか、空気が著しく変わったなおい。
「なぁ、そろそろ模擬戦…。」
「ごめん。じゃあ、始めようか。」
待たせてるのテメーらだよ…。
「たくっ。」
イライラが貯まってくんだよ！
というわけでようやく模擬戦にたどり着ける。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「いいの？２ｏｎ１で？」
「なめるな！」
「ハイハイ。」
「たくっ。いくぞ！！」
「うん！！」
「全力で！！」
「レイジングハート。」
「バルディッシュ。」
「「セーット、アップ！」」
「Ｓｔａｎｄｂｙ，　ｒｅａｄｙ．」
「ｇｅｔ　ｓｅｔ．」
どうやら、バリアジャケットの準備が終わったな。
「じゃあ。」
俺は、なのはと同じように首にかけてる宝石状のインテリジェントデバイスを持ち
「ルミアスアーク、セットアップ！」
と叫んだ。

準備完了。
俺のデバイスの起動状態はなのはとフェイト同様、杖である。
バリアジャケットは、はやてのやつのスカート部分をズボンにした

ようなものを想像すればいいさ。ちなみに、背中の羽は無いからな。
「さぁ、始めるとすっか。」
「「うん。」」
「ほなら、レディ…。」
空中で3人は構えた。
「ゴー！」
「ハアアァァァ！！」
いきなりフェイトが突っ込んできた。
「Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ」
「アアアァァァ！！」
バルディッシュのハーケンが俺に向かって振りかかってきた。
爆発が起こり俺は直撃を受けた。
「うわぁぁ…、フェイトちゃん本気や。」
「クラウドは？」
観戦ははやて、ヴィータ、シグナム、クロノだ。
（へー…。悪くねーな。）
俺は地面に叩きつけられた。
「さぁ、反撃いくぜ。」
俺は左手を前に出し、ミッド式の魔方陣を展開した。
「喰らえ。ブリザードテンペスト！！」
「「！？」」
戦場に吹雪が舞った。
「なのは！」
「任せて。」
なのははバリアを展開して、フェイトと自分を吹雪から防いだ。
「まさか、凍結変換！？」
「みたいだね。フェイトちゃん大丈夫？」
「うん。」
吹雪が止んだ瞬間
「終わりだ。」

「！？」
フェイトは驚きで怯んだ。
それもそのはず。
吹雪が止んでなのはがバリアを閉じた瞬間に俺は、フェイトに向かって一瞬で突っ込んで、すでにフェイトの目の前にいるのだから。
「ハアァ！」
「Ｓｗｏｒｄ　ｍｏｄｅ．」
ルミアスの形態の１つ、ソードモードでフェイトを切った…らいけないので寸止め。
「…。」
フェイトは唖然としてる。
そして俺はなのはに突っ込んだ。
（さすが、お兄ちゃんから御神流を教えてもらっただけあるな。）
「ウオォォ！」
「クッ…。」
「！　ちっ…。さすが御神流を知ってるだけあるな。」
なのははレイジングハートで俺の攻撃を受け止めた。
「なめないで！！」
なのはは俺を振り払って
「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．」
「ディバイーン…バスター！！」
強烈な魔力砲が来た。
「クッソ…！」
俺は防御仕切れず
「グワァァ！」
また、地面に叩きつけられた。
たださっきとは違う。今は、本気で吹っ飛ばされた。
「くそっ…、なっ！？」
なのはのアクセルシューターが飛んできた。
「クソッタレが…！」

なんとか避けきったが、ギリギリ。
「なのはは、確実にクラウドを押してるな。」
「妹が落とされた気持ちはどうや？」
「予想はしてたから特に。だが、今のでクラウドに火がついたな。」
「強いよ、クラウドは。戦ったからわかる。」
落とされたフェイトも観戦してる。

「あいつもやるな。」
「Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｓｏ．」
「でも、負けてらんねーからな。」
「いくぜ。」
「Ｙｅｓ．」
俺はルミアスを前に出した。
そして
「俺の最大魔法、受けてみな。」
そう言って俺は、収束し始めた。
「クラウドが収束？」
「撃ち落としてやるさ。ぜってーな！」
「なら私も。」

「へっ？２人とも収束？」
「まずくねぇか？」
「危ないな。」
「あの２人は危ないよ。」

「デルタクロス…。」
「スターライト…。」
「「ブレイカー！！！！」」

「「「「うわぁぁー。」」」」

激しい爆音、強い突風、破壊されてく模擬戦会場。
「「ブレイク…、シュート！！」」

沈むまでかなり時間がかかった。
「どうなったんや？」
「相討ち？」

「うっ…うぅぅ…。」
「うう…、うぐっ…。」
「相討ちですね。」
「そのようだな。」
こうして、俺達の模擬戦は終わった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
夜、皆で現在食事中。
「クラウドって、凍結変換出来るの？」
「まぁ。つか、炎熱と電気変換も出来るけど。」
「ホンマか！？」
「あぁ。まぁな…。」
「クラウドのブレイカー、かなり強いね。」
「ブレイカーが弱かったら意味ねーだろ。」
「ハハハ。そっか。」
なんて会話していた。
すると
「そういえばなのはって、クラウドだけ君づけしないよね。それ以外は君やちゃんを付けるのに。」
「うん、つけると怒るもん。」
＞なんか…、予想外やね。＜
＞そうだね。なんかいい感じだったから余計にね。＜

フェイトとはやてが黙った。
「一応言っとくがなのはと俺はただの幼馴染みだからな。」
俺はなのはの事を好きだとは思った事は無いんだよ…。
思った事は無いんだ…。

第４話　ファーストアタック（後書き）

第４話です。
正直、リインやヴォルケンリッター、アギト、聖王協会の皆さんを忘れてました。
すみません。
そして、段々字数が多くなってきて上手く定期投稿出来なくなってきましたが、リリカルマジカル頑張ります！
感想及びコメントお待ちしてます。
それでは。

第5話　出動（前書き）

はやて　「何も起こらないから、正直気楽でいたけど、それは間違いやった。これから大きく揺れるんやと思う。
魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。」

第5話　出動

「じゃあね、ヴィヴィオ。」
「バイバイ。」
私、高町ヴィヴィオはｓｔ．ヒルデ魔法学校の初等科2年生です。
「あっ、なのはママから電話だ。」
[もしもし、ヴィヴィオ？]
「はい、なのはママ。」
[ごめんね。そっちは大丈夫？]
「はい、大丈夫です。」
[そう、じゃあね。]
「は～い。」
なのはママからの電話を切った。
そして帰ります。
「うん？また電話だ。」
「もしもし。」
「はい…。はい。ホントですか！？」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「凄いな、クラウド。アギトとユニゾンしても倒せない。」
「あー、クッソー！！」
「有難うございます。」
模擬戦終了。
シグナムさんとその融合騎アギトとの対戦が終わった。
「君の剣技、御神流だったか。すごいスピードだな。」
「俺の接近の戦法は、御神流に魔法を混ぜた戦いですから。」
「そうか。」
「はい。」
「お疲れさまです。」
「なのはか。」

先月から午前中はこんな感じでずっと訓練している。
「一通り全員、クラウドと戦ってみましたけど、どうでしたか。」
「ＳＳＳ＋だけあるな。」
とヴィータ。
「凄いです。」
シグナム。
「同じく凄いです。」
ザフィーラ。
と、個々に感想言われた。
＞凄いねクラウド。＜
＞口だけじゃアレだからな。＜
＞大半俺のおかげだろ。＜
＞まぁな。＜
２人からも言われた…。
「クラウドくん。」
「はやて？」
「戦い見たり、実際戦ってみて思うんやけど。」
「なんだ？」
「砲撃の時と斬撃の時で、クラウドくんが違うような気がすんねんけど…。」
（ウグッ…。）
はやてに隠している事をつかれた。
＞どうする？言うか？＜
＞…。＜
「わかった…。言うよ、俺の事。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
重い空気になった。
俺とクロノ、リンディさんは説明の準備をしている。
「さすがはやてさんね。」
「そうですね。」

「すみません、手伝わせてしまって。」
「構わないわ。全員で隠してた事だし。」
「ユーノ、そっちは？」
［ある程度揃ってきてるよ。］
「すまないな。」
…
「さて、私は行かなきゃいけない所があるから。」
「行ってらっしゃい。」
リンディさんはどこかに出掛けた。
さて、準備が済んだがリンディさんがいないのでどうしようもない。
［クラウド、クロノくん。そろそろいいかな？］
「取り敢えず来てくれ。」
［は～い。］
何かある度に集うロビーに皆が入ってきた。
「入ってきてもらってから言うのもアレだが、実は部隊長がいないので説明を始められないんだ。」
「ほなら、待たせてもらおぅか。」
はやての目付きが怖い…。
「お待たせ。」
「なのはママ、フェイトママ♪」
「「ヴィヴィオ！？」」
「どっ、どうして！？」
「私が許可したの。親子は離れてちゃいけないわ。」
「ヴィヴィオちゃん、ひさしぶりです～。」
「リインさん、おひさしぶりです。」
＞なのは、この子誰？なのはの事ママって呼んだけど。＜
＞そっか、クラウド知らないんだ。私の養子で、高町ヴィヴィオ。＜
なるほど。ってか、リンディさんやりたい放題だな、おいっ！！
「さて、本題ね。」
一瞬にして空気が凍る。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
六課メンバー＋ヴィヴィオ混ぜて、説明会スタート。
「まず、単刀直入に言うと…。」
〜ビーッビーッビーッ〜
「なに！？」
「これ、一級警戒態勢！？」
「エイミィ！」
［ロストロギア反応です。場所は、カレドヴルフ・テクニクス社のミッドチルダ支部です。］
「なんでエイミィさん？」
「通信主任です。」
第９７管理外世界から直通かい！！
「わかりました。それでは機動六課、出動！」
「ハイッ！」
俺達はヘリポートに走り出した。
リンディさんとクロノ、ヴィヴィオを置いて。
＞準備の意味が無くなったね。＜
＞帰ったらやり直しだろ。＜
事件が本格的に動き出した。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「さぁ、ショーの始まりだ…。クフフフ…フハハハハハ！！」
１人の人物が高々と笑いだした。

第5話　出動（後書き）

のほほんな感じで今まで書いてましたが、ようやく動きます。
この事から話は予想外な方向に進みます。
感想、コメント待ってます。

第６話　ファントムコア（前書き）

？？？　＞本格的に事件が動き出す。だがそれは、許されることじゃない。少しでも多くの命が守れるように俺達も動き出す。魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。＜

第6話　ファントムコア

「目的地まであと少しです。」
下を見ると炎上するカレドヴルフ・テクニクス社がある。
「クソッ…。なんだよこれ…。」
「早く沈めねーとまずいな。」
「ハッチ開けます。」
つよい風が入ってくる。
「こちらアクセル3。この任務は件のロストロギア　ファントムコアの封印が仕事です。」
「了解。」
通信が切れてから
「スターズ1、高町なのは、行きます！」
「ライトニング1、フェイト・T・ハラオウン、行きます！」
それぞれが降りてく。
「アクセル1、クラウド・アユトーレ、行きます！」
そして全員が降り、俺達は現場に向かう。
「なんだあれ？」
見るとカレドヴルフ・テクニクス社にモンスターみたいなのがウジャウジャいる。
「召喚獣…いや、ちゃうな。」
とはやて。
「俺が撃ち落とす。皆は中の方を頼む。」
「了解。」
全員が突入するのを確認し
「いくぞ、ルミナス。」
「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．」
俺は外に入る敵を確認し
「シューティング…、クラスター！！」

細かい魔力弾を沢山撃ち込んだ。
「ウギャアアァァ…。」
謎の生物は消滅した。
「なんなんだよ…。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「紫電一千！」
中では他のメンバーが戦闘中。
「アイゼン！」
「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．」
「デリャアアアー！」
「グギャアアァァ…。」
「タクッ、なんだよこれ？　これがファントムコアの力かよ？」
「まだ来るぞ。」
「クソッタレー！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「Ｈａｋｅｎ　Ｆｏｒｍ．」
「ハァッ！」
フェイトも同じく交戦中。ただ、皆とは離れた位置で。
「はやて、お願い。」
「了解。」
遠くではやてがスタンバイしてる。
「任せといて。ブリューナク！」
はやての拡散弾が飛んで謎の生命体を撃ち落とした。
「きりがないね…。」
「ホンマや…。でも、なんやろこれ？」
「わからない。でも、倒さなきゃいけないのは確かだね。」
「そやね！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「シュート！」
なのはもまた、別の所で交戦中。

「ハァ…、ハァ…。」
「ｍａｓｔｅｒ．」
「大丈夫。それより…。」
回りを見渡して。
「まだくるね。」
「Ｙｅｓ．」
「？」
なのははあるものに気付いた。
「ウグッ…、ウワァァ！！」
そこには、唸り声をあげてる男性がいた。
「大丈夫ですか？今…。」
なのはが近づいた瞬間
「ウワァァァァ！！」
男性の体が光り、衝撃波によりなのはは飛ばされた。
「何…？これ…？」
再び男性を見ると
「あっ…。」
男性は血塗れで倒れ、その上に黒い宝石状の物体が浮かんでいた。
「そんな…。」
「Ｍａｓｔｅｒ！」
「！？」
謎の生命体がなのはに攻撃してくる最中だった。
（やられる…！）
なのはが目を瞑った瞬間。
突然天井が破壊され何かが落下し、謎の生命体を潰した。
「うっ…、うぅ…。」
見てみると、１人の人間がいた。容姿は、煙でよく見えないけど黒がベースのバリアジャケットを見にまとった男だった。
「あっ…、あなたは…？」
「…。」

答えない。
「…消え失せろ…。」
男が一言呟いた瞬間。
「グギャアア…。」
突然、謎の生命体は全滅した。
「……。…大丈夫か？」
男が振り返った。
「あっ…、はい…。」
印象的なのは、赤い瞳。
「そうか…。ファントムコアはもう封印した。」
男はそう言って飛び去った。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「だいたい、沈んできたな。」
＞はやて、そっちはどうだ？＜
＞こっちは大丈夫や。＜
戦闘開始からかなり時間がたっている。
＞さっきのなんやったんやろ？＜
＞いきなり突っ込んだあれか。＜
＞そう。＜
「！？」
下から高速で空に飛翔する物体が見えた。
「クソッ、エクセリオンバスター！！」
俺は魔力砲を何発か放ったが、全てかわされてそして飛翔体は一度光って何処かに消えた。
「外したか…。」
「クラウドくん…？」
すると
［こちら、スターズ１。実は…。］
「わかってる。謎の飛来物。…てか、あれは人間だな。」
なのはから通信。

［はい。］
［こちらアクセル3。状況は？］
そして、本部からも。
「ひとまず沈静化しました。」
［お疲れさまです。］
「いえ。」
なんとか事件を解決？した。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
隊舎に戻ってきた私達がまずした事は
「ハァァ…、気持ちいい…。」
「極楽や…。」
「生き返る…。」
そう、入浴。そして
「はやてちゃん、な…、何？」
はやてちゃんがジロジロ私達の事を見ている。特に胸辺り。
「なのはちゃんとフェイトちゃんの胸、気持ち良さそうやな～♪」
「まさか…、はやてちゃん！？」
私達は即座に胸を隠そうとしたけど遅かった。
「ウリャーー♪」
「「イヤーー！！」」
おっぱいマニアのはやてちゃんが襲ってきたので、浴場はパニック状態。
「はやて、やめて！！」
「ストップー！」
「嫌だよーだ♪」
「イヤーーー！」
「なのはちゃん逮捕や♪」
「ヒニャーー！！！！」
中から騒がしい声が聞こえてる時
「一緒に入らなくて良かったなー。」

「…あぁ。」
浴場の外でシグナムとビィータが呟いていた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
一方
「ハァ…、ハァ…。ウッ…。」
俺は自室で倒れかけた。
＞クラウド！？しっかりして！！＜
＞この馬鹿！！＜
＞心配…すんな…。少し疲れただけだ…。＜
俺はベッドに倒れ込んだ…。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「見つけた…。見つけたぞ。ついに見つけたぞ！。フフ…、フフフ…、フフハハハ！！」
不気味な笑い声が部屋一面に広がった。

第６話　ファントムコア（後書き）

ようやく、ハイスピード魔法アクション的になってきました。
ちなみに今回の前書きのキャラは次回明らかに。
そして、この先に大変な事が！
今後もＴｒｉＡｃｃｅｌを宜しくお願いします。

第7話　本当は…。（前書き）

フェイト　「辛い。誰だって感じる感情の１つ。そして、幸せになるための第一段階でもある。
辛さ、苦しさを隠して、彼は語り出す。
魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。」

第7話　本当は…。

最初の出動の夜。
俺は外で風に吹かれてあた。
「…。」
＞星、綺麗だね。＜
＞あぁ。＜
俺は夜空を見てみる。確かに綺麗だ。雲が無く、沢山の星が光っている。
「……。」
「……、明日か…。」
明日は俺の秘密を明かさなきゃいけない。
「ここにいたの。」
俺が黄昏ていると、後ろから聞き慣れた声が聞こえた。
「…なのはか。何だよ？」
「部屋に居ないから…。」
「それで探してた…か？」
「うん。」
なのはは俺の横に並んだ。
「そうか…。」
「言いたくないよね。」
「お前にはお見通しか…。」
「うん。」
「…。」
「…。」
しばらく俺となのはは黙ってた。
「…辛かったら言って。私が力になるから。」
「ありがとう…。」
「じゃあ、おやすみ。」

そう言ってなのははは戻っていった。
「…。」
俺はしばらく残っていた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
翌朝。
俺とクロノ、リンディさんは再び説明の準備をするためロビーにいた。
「今更だが、いいんだな？」
「あぁ、俺もミスったし。気付いた人がいてもおかしくないし。」
「そうか…。」
「こちらユーノ、こっちは準備完了だよ。」
「こっちも準備完了だ。」
「クラウド、なのは達を。」
「あぁ。」
俺はなのは達を呼び出した。
数分後。
「お待たせ。」
なのは達が来た。
「じゃ、始めよう。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「前にも言おうとしたが、単刀直入に言うと、俺は１人じゃない。」
「？」
一同、？マークが頭から出てる。
「口で言うより目で見る方が早いな。」
俺はある魔法を発動した。すると、２人の人間が俺達の前に現れた。
１人は男。容姿はクラウドとあんまり変わらないが、髪が白銀で、赤い瞳をしてる。
もう１人は女で、背丈がギリギリ１６０ｃｍいってない。腰まで届くほど長いクリーム色のストレート髪で、青紫の瞳。そして身長の

割には胸が大きい。あと、1本の大きなアホ毛がある。
「???」
やべっ…。皆さらに目が点だ…。
「オホン。」
一度咳払いをして
「これが、さっきの俺の言葉の意味だ。」
「初めまして、皆さん。私はアリー・アユートレです。よろしくお願いします。私の術式は広域形のエンシェントベルカ式。ちなみに、クラウドと歳は変わりません。」
とアリーは深々と礼をした。
「えー、俺の名はトーマ・アユートレ。術式はアリーと同じ、エンシェントベルカ式。よろしく。歳はクラウドとアリーと一緒だ。」
トーマは軽く済ました。
「2人は俺の中に存在する精神体だ。」
「精神体?」
もう頭がパニックだな、みんな。それもそうか。
「ユーノ。」
クロノがユーノを呼んだ。
[精神体については僕が説明するよ。]
無限書庫の司書のユーノ・スクライア先生が説明を開始した。
[精神体は、言葉の通り精神だけの存在のことだよ。誰が考えたか解ってないんだけど。]

ユーノの後はトーマが
「そして、俺達精神体がこんな感じに実体として現れる場合、共生してる人の魔力が大幅に必要となる。だから、普段は念話で会話したりするんだ。ちなみに、この容姿は元々ある俺達の姿を共生してる人の魔力を使って形にしてるんだ。」
続いてアリーが

「そして、私達精神体にも魔法は使えます。だから共生してる人物の体を借りて戦うことも出来ます。」
2人の解りやすい説明に俺も続きたいとこだが、体に負担がかかる。
「俺がエンシェントベルカの魔法が使えるのも、…SSS＋である事も、この2人が理由だ…。ハァ…、ハァ…。」
だんだんキツくなってきやがった。
「キツいなら戻るぞ。」
「そうしてくれ…。」
「うん、わかった。ゴメンね。」
「いや…。謝る必要ないさ。」
「それでは、また。」
2人は俺の体に戻った。
「ハァ…。」
「大丈夫か？」
「大丈夫だ、クロノ。心配ない。」
「そうか。」
「うん？じゃあ、クラウドって…。」
「あぁ、俺自身はミッド式で、砲撃が得意だ。接近は、トーマの意識を少し使っているだけだ。」
「もしかして、クラウドは左利きで、トーマは右利きとか？」
「そうだ。でも、両方使ってると両利きになったってこった。
OKか、フェイト？」
「うん。」
「そしてアリーは、俺とトーマの魔力とかを、制御したりするのが主だ。あとは、広域魔法の使用時にアリーの意識を使うぐらい。」
俺なりに頑張って説明してみた。
さて…。
「さて…、気が付いている奴もいるだろうが、俺の力についてだ…。」
場が沈黙した。

「やっぱり、何かあるんやね。」
「あぁ…。」
やはり気付いてる奴がいたか。
「俺には…、俺には１つの能力がある…。」
「能力？」
「あぁ、俺にはインフィニット・ドレイン、と言う名の能力がある。」
「インフィニット・ドレイン？　無限…の吸収？」
「そう。その名の通り、無限の吸収能力だ。しかも、その吸収方法も簡単だ。」
場が再び沈黙。
「その吸収方法は、相手に触れる。それだけだ。俺が誰かに触れるだけで、その人物の力を吸収し、俺が使えるようにすることが出来る。まぁ、吸収って言ってもコピーするだけだがな。ただ、この力は魔法だけでなく、例えば歌唱力でもＯＫなんだ。」
「なんて能力や…。」
「なのはは覚えてないか？」
「何を？」
「俺がお前の自宅に居たときに、恭也さんが言ってた事。」
「あっ…。」
【クラウド、君は呑み込みが早いな。】
【そうですか？】
【あぁ。】
私は思い出した。
こんな会話をお兄ちゃんとクラウドがしてた事を。
「そう、俺が御神流をあんな短期間で使いこなせるようになったのはインフィニット・ドレインが原因だ。」
「原因て、そんな…。」
「仕方ないんだ…。この力は無意識に発動してしまう。俺がどうこうしたくても出来ないんだ…。」

だんだん、目が熱くなってきた。
「俺は…、俺は…、自分が怖いんだ！」
声が震えてきた。
「人の力を…、勝手に奪って…、そしてそれを使ってしまう自分が…、怖いんだ…！」
「俺は…、そんな俺が…、俺は…！！」
「もういいよ！！」
「！？」
一瞬何が起こったかわからなかったが、今、俺はなのはに抱きしめられてた。そして俺は、泣くのを堪えていた。
「もう…いいよ。言わなくても。」なのはも声が震えてる。
「でも…。」
「いいんだよ…。言いたくないなら、無理に言わなくても…。泣きたかったら泣いても…。」
この私の一言でクラウドは、堪えていた涙を流し始めた。そして大声で泣き始めた。
そんな彼を私は抱きしめた。
（きっと、苦しかったんだ…。）
＞クラウドには私がついてます。ですから、今は…。＜
＞わかりました。ありがとう。なのはさん。＜
私とクラウド以外はみんな、ロビーを出ていった。
「泣いてていいよ。私が側にいるから。私が、クラウドの苦しみを受け止めるよ。」
私とクラウドは、少しの間このままだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ようやく俺も落ち着いてきた。
「ウッ…。」

（あれ？なんかおかしい。）
確か俺は、体を横にした覚えは無い。
「起きた？」
「あっ…あぁ。」
なるほど、どうやら泣き疲れて眠ってしまったらしい。
「もう、大丈夫なの？」
「あぁ。」
俺はゆっくり起き上がった。
「？」
この時、俺は知らない。
なのはが俺に膝枕している事を。
さて、そんなこと知らない俺は
いつもみたいに、腕を体の後ろで支えにしようとした。
その時
「ヒャッ！！」
「ハアッ！？」
なんかヤバそうな声が聞こえた。
後ろ見ると
俺はなんと、なのはの太股を触ってしまっていた！
「ウワッ！！」
俺は反射的に股から手を離した。
「ゴメン！！」
「…。」
ヤバそうな空気　そらヤダだわな。
「フフッ…。」
「？」
「フフッ…。」
「なの…は？」
「エッチ！！！！！！！！」
と言う訳で、頬に強力ビンタを喰らった俺である…。

「大丈夫なの？本当に。」
「あぁ。頬は大丈夫じゃないけど…。」
「ゴメンね、つい…。」
「いや…。」
「フフ…、ハハハ。」
俺となのはは何故か笑った。
「なのは。」
「うん？」
「…ありがとう。」
「どういたしまして。」
彼女は、微笑みながらそう言った。
「ウッ…。」
その時の彼女は、いつもとは違って見えた。
そして、俺もいつもと違った。
なんせ、なのはの前でここまでオドオドしてんだから。
「もう、平気だ。」
「うん、でもまた辛いこと、悲しい事があったら言ってね。」
「ありがとう。」
俺はロビーを後にした。
私はそんなクラウドを見送ってからロビーを後にした。

第7話　本当は…。（後書き）

作者　「どうも、ラジオ？ＴＡの時間です。
え～、この番組は
魔法少女リリカルなのはＴｒｉＡｃｃｅｌのキャラクターと会話しながら、短い時間で、振り返る的なことをする番組です。」
「と言う訳で、今は孤独ですね。たった１人です。悲しい。
まっ、愚痴は置いといて、今回のゲストいきましょう。
「主人公のクラウド・アユトーレくんです。」
「どうも、クラウドです。」
「さて、どうですか？」
「何が？」
「いやね、正直ね。ウッゼーんだよ作者！！」
「グホッ！！」
リアルパンチ炸裂！
「なんなんすか？あれ。何なんだよ、なのはとのやり取り！！」
「いや、そのまぁ…」
「また、殴るぞ。」
「すいません…。」
「たくっ。」
「と言う訳で、今後も宜しく
「「お願いします。」」

第８話　胸の中の誓い（前書き）

クロノ　「守る物がある。その為にやるべき事をやる。その一つが自分との誓い。それぞれが誓う事は…。魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。」

第8話　胸の中の誓い

「なのはママ、おかえりなさい。」
「ただいま。」
「なのは。もういいの？」
「うん。クラウドは大分落ち着いてくれた。」
「そっか。」
クラウドが自分の事を教えてくれて、辛さを隠せずに泣いて、私が彼を抱きしめてから、数時間後。私が自分の部屋に戻ると、先に戻ってた、フェイトちゃんとはやてちゃん、ヴィヴィオが待っていた。
「私がこんなこと言うのもアレやけど…。クラウドくん、重い物背負ってたんやね…。」
「クラウドって、昔はどんな感じだったの？」
「クラウドはね、昔から何でもかんでも1人で考える人でね。」
「フフッ。なのはそっくり。」
「そやね。」
「え～？」
「なのはママ。クラウドって誰ですか？」
「私のね、幼馴染みで大切な友達だよ。」
「へぇー。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「ハックッシュン！！　ウ～…、誰だ？俺の噂してるやつ…。」
＞なのはちゃんだったりね。＜
＞有り得るな…。＜
確かにあいつだったら有り得るな。
＞内心、嬉しいだろ？＜
＞ハァッ！？＜
＞太股触ったしな。＜
＞おい、トーマ！それ言うな！！＜

＞ヘイヘイ。＜
たくっ…。あの野郎。
はぁ…。穴があったら入りたい…。
「えーい！もう寝る！！」
俺は眠った…。
＞トーマ…。今のちょっと酷いよ…。＜
＞そうか？＜
＞そうです！　きっと私たちが思ってるほど、クラウドは頑丈じゃないんだよ…。＜
＞あぁ…、なるほど。＜
眠ってから少したった。
＞あっ…。＜
＞…、辛いんだよね…。＜
クラウドの瞳から涙が出てきた…。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
深夜
「ウッ…！ウグッ…！！」
俺は魘されてた。
「ウガッ…！！」
悪夢を見てたからだ。
「ウグッ…、アッ、ウアァァ！！！！」
目が覚めてた時、俺は汗だくで軽く息が上がっていた。
「ハァッ…、ハァッ…。ハァ…。クソッ…！」
「無理しないで…。」
「なのは！？　なっ…、なんでお前、ここに？」
何故か、なのはが俺の部屋にいた。
「あのあと、クロノくんが私に言ってきたの。あいつの側にいてやれ。知ってるだろうが、あいつは無理してる。って。」
「あいつ…。」
「…御両親の夢、見てた？」

「なんで？」
「父さん、母さん。って言ってたから…。」
「そっか…。言ったよな？俺の両親は殺された…って。」
「うん。」
「両親が殺されたあの日、俺も父さんと母さんと一緒だったんだ。そして殺される時、俺に逃げろ。って、父さんは言ったんだ。」
私は何も言えなかった。ただ、苦しい過去を生きてたって事はわかった。出会ったあの時点で両親がいなかったんだから。
「俺はその時、全力で逃げた…。とにかく逃げたんだ！」
「クラウド…。」
「だから俺は…！」
私は、震えていた彼の手を握った。
「辛かったよね。」
「…。」
「素直に言えばいいんだよ？強がらなくていいんだよ？」
「…。」
「隠さなくていいんだよ？」
「…なのは。」
「なに？」
「どうして、ここまでしてくれるの？」
「それは、あなたが私の大好きで大切な友達だからだよ。」
「なのは。」
「うん？」
「俺はどうすればいいんだ？」
「自分に嘘ついちゃいけないよ。」
「…みんなの前だったから言えなかったけど、今は甘えていい？」
「いいよ。」
クラウドの声が弱々しい。
「泣いていい？」
「平気だよ。」

彼はまた泣いた。私は何も言わずに、彼を抱いて
「私が側にいるよ。」
と言った。
（辛さと苦しさ、悲しさを幼い時から経験して、耐えてきたんだね。
今まで。）
こうして、夜明けが来た。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
翌朝、目を覚ますとなのはが隣で座りながら寝ている。
しかも、俺の手を握りながら。
「ありがとう。なのは。」
俺はなのはに握られてないほうの手で、なのはを撫でた。
「うぅん…。」
「起こしたか、ゴメン。」
「平気だよ。よく寝れた？」
「あぁ。なのはのお陰だ。」
「私はただ、友達が辛そうにしてたのをほっとけなかっただけだよ。
」
「そっか。」
こいつにはかなわないな。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
さて、俺達がこの新六課に来てから数ヵ月がたった。
「そろそろ、データがある程度揃った頃だな。」
＞なんだかんだで、結構出動もあったしな。＜
「実際、この招集も事件の事だし。」
お馴染み、ロビーに来た。
「おはようございます。」
「おはよう。」
「昨日はどうやった？なのはちゃんとの２人きりは。」
いきなりソレかよ！？
「あのさ…、俺もかなりアレだったけど、なりたくて２人きりにな

った訳じゃねーからな…。」
「なんや。つまんないな～。」
ヒデッ！！
（取り敢えず、お茶を飲もう。）
俺はお茶を取り、飲み始めた。
「ハッハッハッ！　クラウドも言われたな。」
「ブフッ！」
俺はおもいっきり噎せた。
「ゲホッ、ゲホッ…！　クロノお前、なんだそのテンション！？」
「さぁ、なんでだ！クラウド答えてみろ。答えられるならな。ハッハッハッハッハッハッ！」
「知るか！！　ゲホッ…！」
「まっ、特に意味は無いがな。」
「無いのかよ！！」
全員が同じツッコミをした。
てか、テンション変わるの早！！
「さて、冗談はこのぐらいにして、真面目な話をするか。」
ホントなんだよ、さっきの？
と言う俺の疑問は無視して話は進んでった。
「ひとまず、解っている事を言おう。」
全員真面目モード。
「事実を述べると、ファントムコアは人の心に干渉する物体で、干渉されたら最後、暴走するか…。」
「死んでしまう…。」
なのはが一言いった。
「あぁ。」
「…。」
なのはは黙った。
「なのは…。」
「うぅん、大丈夫。」

「そうか。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

説明終了。

「なのは。」

「フェイトちゃん。どうしたの？」

「なのは…。何かあったら言って。私が力になるから。」

「ありがとう。でも、大丈夫だよ。」

「ホンマかどうかアレやけど…。」

「心配無い無い。」

とまぁ、こんな感じで戻っていった。

「では、我々も失礼します。」

「あぁ。」

ヴォルケンリッターも抜ける。

「クロノ。」

「どうした？」

「昨日はすまない。気をつかってもらって。」

「いいさ。旧友が辛そうだったのを慰めるためだ。」

「てか、さっきのテンションてホントなんなんだよ？」

「なんとなくだ。」

「なんとなくかよ…。」

「そうだ。」

「ハァ～…。」

あのテンションは問題だぞ。

＞クロノさん。凄い…。＜

＞その声はアリーか。久々だな。＜

＞お久し振りです。＜

＞トーマはどうだ？＜

＞どうも。てか、どうだ？って何がですか？＜

＞気分的なものだ。＜

＞絶好調だ。＜
「クロノ。」
「どうした？」
「この事件、俺が止めてやる！」
そう言って俺は立ち去った。
「もう誰も失わない！失ってたまるか！！」
そう胸に誓った。

第8話　胸の中の誓い（後書き）

作者　「少し遅れましたが、ラジオＴＡの時間です。え～、前回はクラウドくんに殴られて終わってしまいましたが、今回はちゃんとやっていきたいと思います。さて、今回のゲストは…。」
「こんにちは、高町なのはです。」「いらっしゃい。なのはさん。」
「どうも。」
「単刀直入に言って、クラウドくんの事はどう思ってますか？」
「大好きです。」
「それは、友達として？」
「はい。」
「そうですか。さて、今回と前回で彼を抱くシーンがありましたが、実際抱いてどう思いました？」
「本当に辛い過去を生きてたんだなと思いました。アレは偽りじゃないと思いますし。」
「ありがとうございました。さて、そろそろ終了です。最後にどうぞ。」
「過去と現在が交差するハイスピード魔法アクションストーリー。魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　を宜しくお願いいたします。」
「では、この辺で。」

第９話　暗黒からの手（前書き）

アリー　＞嫌な予感がする。だから私達も隠れて動き出す。そして、その闇も動き出す。

魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。＜

第9話　暗黒からの手

「ルミナス！！」
「Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．」
「バルディッシュ！！」
「Ｚａｍｂｅｒ　ｆｏｒｍ．」
「「ハァァ！！」」
ルミナスのソードとバルディッシュのザンバーがぶつかる。
「クッ…！」
つばぜり合いからお互いが離れる。
＞トーマ、いくぞ！＜
＞オーライ。＜
「アクセルブースト！」
「！？」
俺の高速移動魔法、アクセルブーストが発動し、俺は猛スピードでフェイトに突っ込む。
「二度目は通じない！」
フェイトはその場で呼吸を整える。
「ハァァ！！」
「そこっ！」
「おっ。」
バルディッシュザンバーでの反撃をルミナスのソードで受け止めたが確実に前より俺が見えてる。
「終了だ。フェイト、お疲れ。」
「はい。」
俺らが何やってるかを簡単に言うと、俺の高速スピードがちゃんと見えてるかと、それに対して反撃出来るかどうかだ。
「前回より確実に見えてるな。」
「ありがとう。」

というわけで、訓練終了。
「ハァ…。」
「お疲れ、クラウド。」
「あぁ。お前さんもな、なのは。」＞トーマくんも。＜
＞どうも。＜
「クラウド。」
「シグナムさん。どうも。」
「今度私と模擬戦をもう一度お願いできないか？」
「俺で良ければ、いつでも。」
「ありがとうございます。」
シグナムさんとか…。
＞負けられないね。＜
＞あぁ。アリーも頼むぜ。＜
＞うん。＜
てな訳で模擬戦の約束をシグナムさんとした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
昼食。
「そういえば、トーマ達の食事ってどんなんや？」
＞クラウドが食えば、俺達も食った事になる。＜
「へ～、そうなんや。」
「あぁ。まぁ、だからと言って俺の食事が増える訳じゃないけどな。」
「へぇ。リインは食べてるけどな。」
「ハイです♪」
なんで、そんな話になるのかねぇ…。
まして、かなり疲れてるのに。
とまぁ、駄弁りながら俺は昼飯を食い終えた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「フゥアァ…。」
＞眠そうだな。＜

＞眠いさ…。＜
＞トーマ、大丈夫か？＜
＞バックも辛いよ…。＜
＞お疲れ。＜
＞これからアレでしょ？＜
＞まぁ。＜
というわけで俺達はとある場所に向かった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「ハァ、美味しかった。」
「ごちそうさま。」
残ってた私達、女性陣も昼食を食べ終えた。その時
「！？」
「どないしたん？なのはちゃん。」「わかんないけど…、今誰かに見られてた感じが…。」
「クラウドじゃない？」
「疲れてると思うよ。」
「だと良いけど…。」
「なのはママ、大丈夫？」
「大丈夫だよ。」
とは言ったものの少し不安だった。でも、私にはフェイトちゃん達がいるから大丈夫だと思った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
［どうだ？調子は？］
「久々に使うけど問題無し。」
［そうか。］
とある場所で、俺はクロノとリンディさんと一緒に、あるテストをしていた。
［2人はどう？トーマ、アリー。］
＞問題無し。＜

＞ありません。＜
［わかりました。では…。］
「僕が相手になろう。」
「あぁ、頼む。」
模擬戦開始。
激しい爆音と戦いの音が、しばらく鳴り続け
「ウオォォ！！」
「クッ…！」
俺の勝ちでその場は終わった。
「流石は…、と言っておこう。」
「酷いな。」
［４人とも、お疲れさま。］
「付き合っていただいてありがとうございます。」
その時
〜ビーッビーッビーッ…。〜
「チッ…。」
一級警戒態勢の警報がなった。
「クラウド、行くぞ！」
「あぁ！！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
移動のヘリの中
「また、あの男が来るのかな？」
「なのはさんが見た、黒服ですか？」
「うん。」
全員が静かになる。
「あの男が消え失せろって言った瞬間、あの生物が全滅したり…、
謎の人物だよ。」
「目標に着きました！」
「了解。」
今回の現場は、ミッドの新造ビルで、ロストロギアの反応が確認さ

れファントムコアである可能性がある。なお、現在ビルは炎上中とのこと。
「民間人が多い…。早めに対処せぇへんと。リイン、ユニゾン頼むよ！」
「了解です！！」
「さて、行くぞ！！」
皆飛び降りた。
「壁をぶち破るのが早いね。レイジングハート！」
「Ａｌｌ ｒｉｇｈｔ．Ｂｕｓｔｅｒ ｍｏｄｅ．」
「ディバイン…、バスター！」
なのはの砲撃は、ビルに直撃し、大穴が空いた。
「流石に中は誰もいないな。」
「いたら問題だよ。」
「そうだな。」
「！？」
「なのは？」
「大丈夫。」
「そうか…。」
突入してみると、まぁ人はいなかった。
「さて…。」
それぞれが散った。

「お出でなすった。」
＞こいつら何なんだろ？＜
「さぁな、でも…。」
俺は片手に魔力を集め
「ぶっ潰す対象なのは間違いねー！！」
「プラズマスマッシャー！！」
敵を一掃した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「！？」
人影が見えた。
私はゆっくり立ち止まり
「誰？」
影に聞いた。
「なのはさん？」
「へッ？」
「なのはさん！」
「この声…、スバル？」
「ハイ！」
影の招待は港湾特別救助隊のスバル・ナカジマ防災士長だった。
「「！？」」
突然攻撃が来た。
私達は回避し警戒。するとあの生命体が現れた。
「スバル、アレの事聞いた？」
「聞いてます。」
「じゃあ、行くよ。」
「ハイ！」
旧六課の教導官とその教え子は敵に向かっていった。
「リボルバー…。」
「アクセル…。」
「「シュート！！」」
「ウギャァァァ…。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
全員が探しているファントムコアが未だ見つかっていない。
「いくらなんでもおかしいな…。」
＞クラウド、前！＜
「何！？」

前方にファントムコア、そして謎の男。
「何をしている？」
「ファントムコアを回収してるだけだ。」
「何！？」
「それでは。」
「させるか！」
俺は突っ込んだ。
「！？」
「ほぅ、なかなかだな。」
驚いたのは俺だ。俺の剣を片手で止められたからだ。
「だが、死ね。」
男の砲撃を受けて、飛ばされた。
「グハッ…！」
「では。」
男は消えた。
「クソッ…！！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「リイン、行くよ。」
「ハイです！」
「「仄白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹！　アーテム・デス・アイセス！！」」
数年前の火災同様、ビルを凍らせ火災は止んだ。
すでに、突入した人間は全員退避してるので捲き込まれる心配はない。
こうして、火災は止められたものの、ロストロギアは何者かに盗られた…。
（あの男は、いったい…。）
ヘリの中でずっと考えていた。

第9話　暗黒からの手（後書き）

「更新が遅れてく～！
はい、今回のゲストは…。」
「はい、八神はやてと。」
「リインフォース？です～♪」
「初の2人で登場です。」
「「イエ～イ♪」」
「テンションたけー…。」
「私達は。」
「新六課で。」
「「毎日がんばってま～す♪」」
「お疲れ様です…。」
「ありがとう♪」
「ありがとうです♪」
「ハイ、お互いに…。」
「リリカル。」
「マジカル♪」
「「「頑張ります！」」」

第１０話　前日（前書き）

クラウド　「なんだか息苦しい。だんだん事件の概要がわかってきて来たのも理由の１つ。それでも、進まなきゃいけない。守るものがすぐそばにあるから…。
魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。」

第１０話　前日

「さて、解ったことを話そう。」
これまでのファントムコアの事件で謎めいていた事のいくつかがわかったらしい。
全員集合してる。
「まず、あの謎の生物だが…、あれは召喚獣ではなく、人工的に作られた生命だ。」
「つまり、裏で誰かに造られていて、その造ってる人間が一連の事件の犯人で、何らかの理由でファントムコアを発動させてると…。」
「あぁ、クラウドが見た男で間違いないだろうな。」
前回の事件で現れた男。
俺の剣を片手で受け止めたあの男の事だ。
「…。」
「クラウド…。」
「なんにせよ、早急に解決させなきゃいけないのは確かなんだ。みんな、よろしく頼む。」
「ハイ。」
「それとなのはを助けた？のかな。あの黒服についてはわからないことだらけだ。」
「少なくとも、ファントムコアを使ってなにかを企んでる訳じゃないと思う。」
「封印も黒服が？」
なのはは頷く。
「また、わからないことが増えちゃったわね。」
「えぇ。取り敢えず今日は終了だ。」
皆が戻るために立つ。
俺も立とうとしたその時。
「イッッ…！」

体に痛みがはしった。
「クソッタレ…。」
「クラウド、大丈夫？」
「あぁ、すまない。なのは。」
前回の出動で、俺はあの男と交戦し体にダメージを受けていた。
「無理しちゃダメだよ。」
「なのはの言う通りだよ。」
「あ…、あぁ。」
「傷は無いけど、無理すると体を壊すよ。クラウドくん。」
「すいません。シャマル先生。」
六課の医務官、シャマル先生のお叱りをくらった。
「少なくとも、今日は訓練しない方がいいと思う。」
「はい…。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「アイゼン！」
「Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ．」
「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．」
「ラケーテン…、ハンマー！！」
「レイジングハート！」
「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．」
現在、なのはとヴィータが模擬戦してる。
俺はと言うと、今日1日安静してろと言われた為、見学。ちなみにクロノが監視についてるため、動けない…。
「思い出すね。」
「おん？」
「私達の初めての戦闘もこんな感じだったよね。」
「そうだな。」
「でも、あの時とは違うよ！！」
なのはのアクセルシューターがビィータを囲む。
「なにっ！？」

「アクセル…、シュート！！」
「のわぁぁ！！」
全弾命中。
模擬戦終了。
「クッソー！！」
「大丈夫？」
「タリメーだ！！」

「ハァァ…。」
「駄目だぞ。」
「ハイ…。」
クロノ厳しい…。
こうして、暇だった模擬戦見学は終了。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「ハァァ…。」
＞仕方ないぜ、元気だしな。＜
＞クロノさんも心配してるんだよ。＜
「わかってるよ。」
＞だと良いけど。＜
自室に戻る時、トーマとアリーにも言われた…。
「…。」
＞＞本当にわかってる？＜＜
「すいません…。」
（今日は厄日だなこりゃ…。）
この時、俺は知らなかった。
このあと起こる地獄を…。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
夕方。
俺はまた、風に吹かれていた。
「…。」

「夕日、綺麗だね。」
後ろからなのはが現れた。
「なのは…。」
「どうしたの？模擬戦出来ずにイライラしてた？」
「まっ、そうだが…。」
「フフ。」
「笑うなよ！」
「ごめんごめん。」
「…。」
「…。」
しばらく2人とも黙っていた。
「嫌な風だな。」
「うん…。」
「…！」
「えっ？」
「…死なせない！」
「あ…。」
「…死なせない。死なせるもんか！！誰一人、死なせるもんか！」
俺は拳を強く握った。
「クラウド…。」
「あっ、すまない…。」
「いや、私達で守ろう！　必ず、守りきろう。」
「なのは…。」
＞タクッ、お前さんは1人で考え込み過ぎなんだよ。＜
＞本当に。＜
＞トーマ…。アリー…。そうだな。お前らもいるんだよな。＜
＞＞忘れるな！＜＜
「ハハハハ。」
「？」
「3人とも、ありがとう。」

そう言って俺は部屋に戻っていった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「さぁ、パーティーの準備が終わった。あとは主役を呼ぶだけだ。
フフ、ハハハ…、フハハハハ！！」
男は確実に計画を実行へと進めていた。

第１０話　前日（後書き）

作者　「Ｆｏｒｃｅとｖｉｖｉｄをアニメ化して欲しい！！　さて今回は。」
クロノ　「どうも、クロノ・ハラオウンです。」
「どうもです。さて、クラウドについてどう思いますか？」
「あいつは、なのはそっくりですね。性格とか。」
「そうですね。あと、クラウドの秘密の訓練ってなんなんですか？」
「さすがにそれは言えません。」
「そうですか。」
「では、これからも。」
「ＴｒｉＡｃｃｅｌを。」
「「よろしくお願いします。」」

休憩編　リリカル雑談会？（前書き）

作者　「少し休憩だ！と言う訳でグダグダいきます。リリカル雑談会？始まります。」

休憩編　リリカル雑談会？

「どうも。作者です。皆さんこんにちは。」
「こんにちは～♪」
「今回は特別編で、ＴｒｉＡｃｃｅｌのキャラクター５人とグダグダ喋っていく感じでやっていきます。」
「よろしくお願いしまーす♪」
「はい、お願いします。」
と言う訳で書いた本人も？となる会話がスタートした。
「それではまず…。」
「作者さんに質問や！」
「ハイッ！？」
いきなり台詞を消されてしまった。
「最近、更新が止まっているらしいですがどうなんですか？」
なるほど。
「そうですね。最近は投稿したやつのミス等を修正してましたね。」
「なるほど。」
「ではこちらも。話の中で自分が出てこない時何をしていますか？」
聞かれたので反撃。まぁ、話に出してないのは俺なのだがな。
「まず、クラウドくん。」
「俺か…。そうだな、大体はグータラしてるからな…。まぁ、休憩です。」
「クラウド…。認めちゃったよ…。」
「まぁ、何となくやけどイメージ沸くな。」
「なのは、はやて、少し黙れ！」
「「すいません。」」
「さて、次はクロノくん。どうぞ。」
「僕か。データの整理とかその辺かな。」
「さて、女性陣いきましょう。」

「はーい！！」
「元気だな…。」
「さて、なのはさん。」
「はい♪　私は訓練メニュー考えてます。」
「フェイトさんとはやてさんは？」
「私は特にどうこうは無いかな。」
「私はそうやな…。」
「はやてはデータ整理の手伝いしてくれるな。」
「そやな。」
＞ちなみに、私達は休んでます♪＜
＞やることホント無いからな。＜
「トーマとアリーは休んでます。だそうだ。」
「なるほど。さて皆さん、少し話を振り替えると言うか気になる所について話してみましょう。ではなのはさん。」
「はい。」
「クラウドくんに太もも触られた時、どう思いましたか？」
「エーー！！！！！」
「いや、あの…。正直仕方無いと後から思ったけど、嫌でした。」
「すまない…。」
「何があったの！？　ねぇ、なのは！！」
「いや、フェイトちゃん！　これはね…。」
パニック状態が収まり
「なるほど。そういう訳ね。」
「うん。」
このやり取りは第7話に書いてあります。
「では、クロノくん。」
「はい。」
「あの異様なテンションはなんだったんですか？」
「そうだよお兄ちゃん。あの時のハイテンションは何だったの？」
「お兄ちゃんはやめろ。」

「本当だよクロノくん！　あの時ビックリしたよ。クラウド吹いちゃうし。」
「ブッ！！　ゲホッ…！ゲホッ…！なのは！！お前…。」
「また吹いたの？」
「クラウドくんて、よく吹くよね。」
「タイミングが悪いんだ！」
＞本当に悪いね。＜
「うるさい！」
「で、話を戻すけど、アレは何だったの？」
「あれはそうだな…。少し遊んでみたんだ。」
「どうでもいいよ…。」
えぇ、話がわからぬと言う人は第８話をご覧ください。
「お次はフェイトさん。」
「何ですか？」
「模擬戦でクラウドくんに落とされた時、どんな気持ちでしたか？」
「悔しかったのが主かな。だけど凄いなって思った。」
「なのはちゃんとブレイカーでぶつかり合うしね。」
「アレで飛ばされそうだったぞ。」
「すまん。」
「しかも、決着ついてないやんか。」
「近いうちに決着つけるか。」
「うん。」
これは、第４話です。
「はやてさん。」
「はーい♪」
「入浴時になのはさんとフェイトさんを襲いましたよね？」
「はい。楽しかった。」
「はやて！こっちは酷い目にあったんだよ！！」
「本当だよ！はやてちゃん。」
「ごめんな。次から許可を得てからするな♪」

「「止めて！！」」
こちらは第６話のアレな所です。
「最後、クラウドくん。」
「何で最後なんだ…？」
「なのはさんの太もも触った時、正直どうでした？」
「おい、作者！！」
「どうやったん？」
「普通にヤベッって思ったよ！！大体なのは、ビンタはねーよ！」
「いや、つい…。」
こちらは再び、第７話です。
「最後に皆さんに。なのはさんがクラウドの事を呼び捨てにする事についてです。」
「僕はなんとも思わなかったな。」
「私は気になってた。なのはちゃんは呼び捨てしないから。」
「私も。」
「本当にクラウドくんて私が言うと怒るもん。クーちゃんもだけど。」
「止めろって！！」
これも第４話です。
「皆さん、何かやりたいことありますか？」
「しりとりやろう♪」
と言う訳で何故か作者→クラウド→クロノ→はやて→フェイト→なのは
の順で開始。
「しりとり。」
「林檎。」
「誤解。」
「祈り。」
「リリカル、マジカル！」
「「頑張ります！！」」

「こらこらそこの２人、ストップ、ストップ！！」
「何？」
「しりとりじゃない！」
「本当に。」
「「すいません。」」
「ではそろそろ。」
「「「「「はい。」」」」」
「これからも。」
「頑張りますので。」
「皆さん。」
「魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌを。」
「宜しく。」
「「「「「お願いします。」」」」」

休憩編　リリカル雑談会？（後書き）

最近いろいろと忙しくて更新が出来てない状況です。この物語を読んでる方全員に謝ります。
気持ちを変えて頑張りますので、宜しくお願いいたします。

第１１話　幸せの終わり。地獄の始まり。（前書き）

クラウド　「数年前に交わしたなのはとの約束。それは偶然にも守った。だからほかの約束も守る。
世界が平和である今のうちに。

魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。」

第11話　幸せの終わり。地獄の始まり。

夜中。
俺は1人でまた、外で風に吹かれていた。
「…。」
（何だろ？　この感じ）
＞大丈夫か？　クラウド。＜
＞あぁ、大丈夫だ…。＜
＞嘘。＜
＞…。いや、その…。＜
正直なところ、怖い。
死なせはしない。とは、言ったもの自信がない。
＞どうせ、1人で抱え込んでんだろ？＜
＞…。＜
＞図星みたいだな。＜
＞クラウドの癖だよね。いつも1人で考え込む。＜
さすがにお見通しか…。
＞1人で抱え込むなよ。俺達やクロノ、なのはだっているんだし。＜
＞あぁ…。＜
しばらく俺は、動かなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
翌朝。
「うぅ…。」
「おはよう。」
「なのは？」
目の前になのはがいた。
「お前、何でここに？」
「それはこっちの台詞。クラウドこそ、なんでこんな所で寝てるの

？」
「えっ！？」
なんと俺は、夜中に風に吹かれた場所で眠ってしまったらしい。
「そうか。眠っちまったのか…。俺…。」
「みたやね。」
「お疲れのようだね。」
「大丈夫か？」
どうやら、みんなに見られていたようだ。
「まいっか。よし。」
と言って俺は立ち上がり
「今日も頑張るか！」
と意気込むと
「おーーー！」
と周りがあわせた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「ではクラウド。頼む。」
「はい。よろしくお願いします。」
シグナムさんと約束の模擬戦が開始される。
「あの時勝てなかったけど、今回は負けねー！」
とアギトが怒鳴った後
「「ユニゾン・イン！！」」
シグナムさんとアギトがユニゾンした。
「本気で行くぞ！」
「望むところです。」
一度戦ってるので負けたくない。
「トーマ、アリー、行くぞ！！」
＞おぅ！＜
＞行きます！！＜
「おそらくこの戦い、３ｏｎ２だな。」
観戦のクロノが一言

「それって…。」
「あぁ。シグナムとアギトが戦うのは、クラウドとトーマ、アリーの3人だ。」
「クラウドも本気なんだ。私達に話したから。」
戦う2人以外は全員観戦。
「さて、そろそろ。」
「はい。」
「レディ…。」
はやての合図に合わせてシグナムさんと俺は身構える。
「ゴー！」
「「ハァァァ！！」」
模擬戦が開始した瞬間、俺はシグナムさんに、シグナムさんは俺に向かって突っ込んだ。
「レバンティン！」
「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．」
「ルミナス！」
「Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．」
空中で俺達は鍔迫り合いになった。
「流石だな。」
「それほどでも。」
「だが、負けられん！」
シグナムさんが俺から離れた。
＞行くぜ。シグナム！＜
「あぁ。」
「Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ．」
「オオオォォォ！！」
「クソッ！トーマ、アリー。」
＞オーライ。＜
＞任せて。＜
俺は2人の意識を使い、シグナムさんの攻撃を瞬間移動で避けた。

「なっ！？」
「今度はこちらの番です！」
「ストライク…、スターズ！！」
「クッ…！」
俺の砲撃はシグナムさんを掠った。
（速いな。）
＞でも、手応えはあった！＜
＞このまま押し切るよ！＜
「任せろ！！」
俺はルミナスアークを左手から右手に持ち替え
「ハアアァァァ！！」
シグナムさんに斬りかかろうとした。
「夜天の騎士を舐めるな！」
「！？　なっ…、バインドだと？」
「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．」
「飛竜…、一閃！」
「グアァァ…！」
防御したがまともに攻撃を受けた俺は、かなり飛ばされ、ジャケットの所々が軽く裂けた。
（流石だ。）
＞感心してる場合か？＜
＞いや、だが凄いな。＜
「さて、こっちも！」
ルミナスを構えて
「シューティング・クラスター！！」
「当たらん！」
シグナムさんは魔力弾を避けながら確実に接近している。
「当てるのが狙いじゃない！」
「なに！？」
魔力弾を操作し、シグナムさんの目の前で魔力弾同士をぶつけ爆発

させた。
＞なにー！？＜
「吹き飛ばす！　ハァァ！！」
レバンティンにより爆煙は吹き飛ばされた。
「クラウドがいない？」
そう、この数秒の間に俺はかなり上空に飛んで行った。
「俺の力の一端、見せてやるよ…。」
＞何か来るぞ！＜
＞分かっている。＜
「ルミナス、カートリッジ・ロード。」
「Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．」
俺は、カートリッジを４発ロードし
「星よ集え…。」
呪文を唱え始めた。そして、収束を始めた。
「スターライト・ブレイカーを使う気だね。クラウド。」
「うん。そうみたいだね。」
観戦の２人が呟いた。
＞シグナム！！＜
＞任せろ！＜
シグナムさんが移動しようとした時
「！？」
＞バインド！？＜
俺が仕掛けたバインドによって、シグナムさんは動きを封じられた。
・・・・
「全てを切り裂く光となれ…。」
「違う！スターライト・ブレイカーじゃない！！」
呪文の違いになのはがきずいた。
「えっ！？」
観戦側が驚きを隠せない。
＞何なんだ！？＜

「クソッ…！」
そして、シグナムさんも焦り出した。
「貫け、閃光…。」
どんどん収束が進んでいき、魔力の塊が大きくなっていく。
「！？　ルミナスアークがソード形態になってる！」
「うそっ！」
そう、呪文を唱える前から俺は、ルミナスの形態を変えていない。
「行くぞ…。」
俺はルミナスの刃を塊に刺した。すると塊はみるみる小さくなり、最終的には消えた。
そして
「スターライト…。」
ルミナスを振りかぶり
「スラッシャー！！！！」
と叫んで、その場でルミナスを縦に振った。
「！？」
すると、バルディッシュのジェット・ザンバーをはるかに超える大きさの刃がシグナムさんを襲った。
「クソッ…！！」
俺の攻撃は防御された。だが、その防御も切り裂いた。
「グァァァァァ…！！！」
そのままシグナムさんは地面に叩き付けられた。
「…。」
「これが…、クラウドの力…。」
「そうだ。これがあいつの力の一端だ。」
こうして模擬戦終了。
「あの、大丈夫ですか？」
「あぁ、こんな事でどうにかなる程、夜天の将は脆くない。」
「もう少し、加減してくれよ！」
隣でアギトが愚痴っていたが、本当に大丈夫そうだ。

「しかし、スターライト・ブレイカーを斬撃魔法に変えたのか。」
「はい。吸収した魔法や能力をいじったりする事が出来ますから。」
「なるほど。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「すごいね。ブレイカーを変えるなんて。」
「と言っても、トーマとアリーがいなきゃ出来ないよ。あんな事は。」
隊舎の廊下でなのはと会話中。
＞クラウドとトーマの意識の調節って難しいの。＜
＞そうなんだ。＜
「おい、アリー。余計な事を言うな！」
＞はーい。＜
なんて会話をしていた。その時
「！？」
「なんだ！？」
一瞬、謎の感覚が俺となのはを襲った。
「気を付けろ…！」
「分かってるよ！」
俺となのはは背中を合わせて警戒した。
「！　なのは、下！！」
「えっ！？　キャアッ…！！」
突然、足元から1人の男が現れ、なのはを捕まえた。
「うぅ…！」
「クソッ！　アステリウス！！！」
俺は叫んだ。すると体中が眩しい程に輝きだした。
「なのはを、はなせぇぇぇーーー！！」
男に向かって、突っ込んだ。
「ウオオオォォ！！」
右手で握っていた剣で男に切り掛かった。
「チッ…！！」

「おや、君はあの時の少年ではないか。」
なのはを捕らえ、俺の剣撃を片手で受け止めて俺の目の前に立っている男は、少し前にあったビルの火災の時
俺が戦った男である。
「きさまぁぁ！」
「あまいな！！」
俺はそのまま投げ捨てられ、壁に体をぶつけられた。
「グアッ…！」
「では、彼女は連れて行くよ。」
「うっ…！　ク…ラウ…ド…！！」
「なのは！　クッ…！！」
男は光り、そしてなのはを浚って消えていった。
「あっ…。あぁ…。」
俺は跪き
「嘘だ…！そんな…！！」
すると後ろから
「何や、今の！？」
はやて達がちかずいてきた。
「誰！？」
そこには黒を基調とした騎士甲冑を着た少年がいた。
「なのは…。そんな…。」
「貴方は一体…？」
だが、今の俺にははやて達の言葉も耳に入ってこない。
「まさか…、クラウド？」
「クッ…！　クッソ…！！」
「クラウドくん？」
「ううあああああぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！」
俺の叫び声は、儚く消えていった。

第１１話　幸せの終わり。地獄の始まり。（後書き）

「更新がかなり遅れましたが、なんとか１１話まで出来ました。
さて、久々のこのコーナー行ってみよう。　今回は…。」
「皆さんこんにちは。リンディ・ハラオウンです。」
「はい、と言うわけでリンディ・ハラオウンさんに来ていただきました。」
「宜しくお願いします。」
「最近出番が無いようですが、どうですか？」
「まぁ、部隊長ですし。仕方ないですね。」
「それではもう１つ。お子さんが沢山いますよね？」
「はい。今のハラオウン家は私をいれて７人ですから。」
「そのうち、３人が部下ですよ？どう思いますか？」
「賑やかだわ。いいんじゃないかしら？」
「ハァァ…。それではまた次回会いましょう。それでは。」

第１２話　暗闇に差した小さな光（前書き）

トーマ　＞穏やかだった日々に突如訪れた最悪の事態。なのはが拐われ、それによりクラウドの心も崩壊してる。だからと言って立ち止まってはいられない。その為にもまずは…。魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。＜

第１２話　暗闇に差した小さな光

「な…、のは…。」
「クラウド？　どうしたの？」
なのはがあの男に拐われた事で、俺の心は
完全に壊れた。
「なのはがどうしたの？」
「嘘だ…。そんな…。」
「ねぇ？」
「…。」
「…。」
「まさか、そうなの？」
どうやら、何が起こったのかを悟ったようだ。
「あ…、あぁ…。」
「そんな…。」
「…。」
「…。」
そんな沈黙が少し続いた。
「すまないが…、少し１人にさせてくれ…。」
俺はまるで、魂を抜かれたゾンビのように立ち上がりノロノロ動いて去った。
「クラウドくん…。」
もはや、誰の声も耳に入らなかった。トーマやアリーの声も。
「…。」

クラウドが見えなくなったのを確認した私達は
「どうして…！」
クラウドの前で言えなかった事を言った。

「…なんでや…。なんでなのはちゃんが…？」
「クソッ…！！」
これには流石のクロノも、冷静さを少し失っていた。
「？」
私はある光る物を見つけた。
「どうしたん？フェイトちゃん。」
「これは…。」
そこには、赤い宝石状の球体があった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「クッ…！」
「ほう、悪足掻きを。」
私は今、何処だかわからない場所に捕われている。
「必ず皆が、助けに来てくれる！！」
「さっきから、有り得ないと言っているだろう。」
「クッ…！　ウン！！」
腕と足首を拘束されてる私は、それでも足掻く。
「無駄だと何度言えばわかるんだい？」
「諦めない！！」
「無駄だよ。さて…。」
男は黒い宝石にちかずいた。
「ッ！？　そっ…、それは！！」
「そう、ファントムコアだ。だが、今の君には意味がない。何せ、希望が心の中にあるんだからね。」
「だから、何？」
「その希望、砕かさして貰おう。」
「なっ…、何を？」
男は一本の剣を持ち出し、私の腕に翳した。
「ハァァ！！」
「アアアァァァ！！！！」
男はその剣で私の腕に切り傷を付けた。そこから赤い血が流れ出し

ている。
「まだだよ。」
「ウグッ…！！」
そしてそれを、何回も繰り返した。
「ハァッ…！　ハァッ…！！」
「ほぉ、まだ諦めないか。」
「絶対に…、諦めな…い！　ハァッ…！」
「ならば。」
男は鞭を取り出して
「これで！」
「アアァァッ！！」
その鞭で傷口を叩いた。さっきと同じように何回も。
「ウッ…！」
どれだけ傷つけられたのか解らない。解ってるのは、身体中が傷だらけで、出血により制服が赤く染まっている事。その制服が所々裂けてる事。傷みで意識が朦朧としてる事。そしてなによりも心が、ズタズタにされた事だけ。
（誰も来ない…。助けに来てくれない…。本当なんだ。誰も…、来てくれないんだ…。信じてたのに！）
そう思ってしまった瞬間
「！？」
まるで体を締め付けられる感覚が襲った。
「アッ…、アッ…！」
「ほぉ、ようやくか。」
「ウグッ…！」
「やっと完成する。最高のファントムトレーサーが！！」
「イヤ…！」
「？　それにコレは…！！」
「イヤだ…！イ…ヤ…。アグッ…！」
体の中にファントムコアが溶け込んでくる。

「イヤァァァァァァーーー！！！！！」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「…。」
俺は自室にある空間を発生させ、その中で黙っていた。
「いつまでそうしてるつもりだ？」
「トーマか…。」
そこにトーマが現れた。
「いつまでそうしてるつもりだ？って聞いてるだろ！」
「俺は、もぅ…。」
「クラウド！てめぇ！！」
トーマは俺の胸ぐらを掴んだ。
「俺のせいだ…。俺のせいで…、なのはは…！」
目が熱くなってくる。
「ふざけんなよ！！きさまぁっ！」
そう叫んで、トーマは俺のほうを殴った。
「そう言うふうに責任を感じてるならなぁ、こんな所で黙ってねぇで助けに行けよ！！」
「…。」
「なのはだって、お前が助けに来る事を望んでるハズなんだ！」
「…。」
「お前がなのはのことが好きなら尚更だ！逃げてる場合か！」
「…。」
「大切な人を守れなかったからなんだ！それなら助けてやれよ！！」
「…ッ！」
目から涙が流れ出す。
「…だって。」
「ハッ？」
「俺だってそうしてーよ！！　だけど俺は…、あいつに勝てない…！助けたくても助けられねーんだ！！」
「ハァ～。まったく、お前さんは何べん同じ言葉を他人に言わせる

気だ？」
トーマは呆れた口調で喋った。
「エッ…？」
「確かに、お前1人じゃ無理だろう。だけど、なにも全部1人で解決する必要ないだろ。」
「そうだよ。私達がいるし、フェイトさん達もいる。皆で助けに行けばいいんだよ。」
「アリー…。いたのか。」
「うん。」
「だからさ、こんな空間で引きこもるなよ。」
「…あ、あぁ。トーマ、アリー…。すまない。」
「きにすんな。」
「よし！」
俺は自分で発生させた空間を閉じた。それと同時にトーマとアリーも、俺の中に戻った。
「必ず助けよう。」
＞当たり前だ。＜
＞うん。＜
俺は自室から出た。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「なのは…、そんな…。」
「フェイトちゃん…。」
「クッソ…！」
皆悲しんだり悔やんだりしてる。そこへ
「クラウド？　大丈夫なのか？」
俺が入った。
「あぁ。トーマに殴られて目が覚めた。」
「そうか。」
「今から、今回の事件に関する事で、俺が隠してる事、知ってる事を全て話す！」

俺はもう、迷わない！

第１２話　暗闇に差した小さな光（後書き）

「本編がクライマックスに突入しそうです。それと、この小説に出てくる、ちとアレなシーンは読者の皆さんの想像にお任せします。さて今回は…。」
「皆さんこんにちは、高町ヴィヴィオです。」
「フェイト・Ｔ・ハラオウンです。」
「久々の複数ゲストです。」
「宜しくお願いします。」
「お願いします。」
「さて、ヴィヴィオちゃん。基本的にどんな一日を送ってますか？」
「六課の隊舎から学校に行って勉強の毎日です。」
「お疲れ様です。では、フェイトさん。」
「はい？」
「クラウドくんとなのはさんは、かなりいいカップルに見えると思いますが、２人がもし夫婦になったらどうしますか？」
「えっ…、答えなきゃいけないですか？」
「お願いします。」
「えっと…、たぶんこれまでと変わらないと思います…。」
「ありがとうございました。」
「お疲れさま、フェイトママ。」
「…。」
「では、この辺でさよなら。」

第１３話　明かされる真実（前書き）

クラウド　「俺の心の目を覚ましてくれたトーマとアリー。でも、最初からずっと一緒だった訳じゃない。事件を解決させる為にもコイツらとの事もアイツの事も俺の秘密も全て伝える必要がある。だからこそ…。

魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ　始まります。」

第13話　明かされる真実

「…？　どういう事？」
いきなりモードが変わった俺が言った言葉にクロノとリンディさん以外、目が点になってる。
「今言った通りだ。今からこの事件について、俺が知ってる事と、黙っている事を全て話す。」
すると
「教えてくれる訳やな、色々と。」
はやてが返した。
「あぁ。こうなった以上、立ち止まってはいられないからな。」
「クラウド、良いのか？」
「あぁ。ただ、お前とリンディさんにも手伝ってほしい。」
「解った。」
「連帯責任ですね。」
こうして、全てを話すことになった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「どれから行くかな？」
「ほんなら、あの黒服の事から聞かせて貰うよ。」
「解った。あの黒服…、いや騎士か。あれは…。」
俺は目を閉じて、2、3秒後に開けた。
「俺だ。」
「クラウド？」
「いや、トーマ君やな。」
はやて、勘がいい。
「あぁ、その通り。見ろよ、瞳の色が違うだろ？」
と説明して俺は瞳を指さした。
「本当だ…。」
「精神体は、共生してる人間の体を完全に借りる事が出来る。ちな

みに、これまでの戦闘は、クラウドの体を完全に借りてる訳じゃない。クラウドに軽く助太刀してる程度だ。」
「???」
はやてやヴォルケンリッターはともかく、フェイトは解らないようだ
「う～ん…。どうすればわかりやすいかなぁ…。」
「瞳の色で解るさ。」
俺は赤目から金目になった。
「今はクラウド？でいいの？」
「あぁ、単純に金目が俺、赤目がトーマ、青紫色の目ならアリーと考えればいいさ。」
「ただ、私達は瞳の色だけど見分け方は人それぞれ違うんだ。例えば髪の色が変わったりとかね。」
今度は青紫になった。つまりアリーだ。
「なるほど。」
なんとなくは解ってくれたようだ。
「えっ！？ちょっと待って。て事はあの時、クラウドは自分の家族を撃ったの？」
「まぁ、そうだな。」
「なんでそんな事を？」
「あの時、あの生命体やファントムコアの対処法を知ってたのは俺だけだ。あんな序盤ですらすら解決したら怪しまれる。だから、トーマを使ったんだ。」
「…。」
「そして、あの騎士甲冑だが、アレはコイツの力だ。」
そう言って俺は、首にかけてる１つの指輪状のシルバーブルーの物体を見せた。
「指輪？」
「待機モードだとそうだな。」
「スバルと同じデバイス二個持ち？」
「いや、シルバーとは違う。俺は二個で一個だから。」

「？？？？？」
皆、頭がパンクしたな…。
「…少し休憩するか？」
「うん…。」
さすがに俺も少し疲れたし、皆は頭が爆発してるので休憩した。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「さって～、準備が整ってきたな。」
「お疲れ様です、チーフ。」
「君達もお疲れさん。」
破壊されたカレドヴルフ・テクニクス社ミッドチルダ支部の地下でなにやら作業が行われていた。
「後は、届けるだけか。システムとかに異常はあるか？」
「ありません！！」
作業員全員が答えた。
「よし。これで終わりだ。よし、届けに行くぞ！」
「ハイッ！！」
地下から一台のトラックが動き出した。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「それじゃ留守番、お願いね。」
「はい。」
「アルフ、２人を宜しく。」
「任せろ。エイミィもしっかり。」
「うん。」
私、エイミィ・ハラオウンは母であるリンディ・ハラオウンと夫のクロノ・ハラオウンからの呼び出しで久々にミッドチルダに向かう最中。
「でも、遊び気分じゃダメだし、急がなきゃ！」
目的の場所に駆け出した。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「さてと…、そろそろ再開するか。」

「うん、だいたい整理出来た。」
休憩中に、はやて達がフェイトに解りやすく教えてくれたお陰でスムーズにいけそうだ。
「さっき、シルバーと同じって言ったよな？はやて。」
「うん。」
「実を言うと、俺はお前と一緒なんだ。はやて。」
「えっ！？」
［ピピピ］
クロノに通信が入った。
「通信か。出てくる。」
「解った。」
クロノは外に出た。
［もしもし、クロノくん？］
「どうした？」
［今出たから待ってて。］
「あぁ。解った。」
通信を切り、クロノが戻ってきた。
「すまないな。」
「いや、平気だ。」
再び説明スタート。
「んで、私と一緒ってどうして？」
「コイツ、アステリウス…、正確には蒼銀の剣だが。これはロストロギアだ。」
この言葉で辺りの空気は凍りついた。
「…。」
「…。」
「…なるほど、それで私と一緒って訳ね。」
そして、その氷を溶かしたのははやてだ。
「あぁ。」
はやては勘がいいのか何なのか解らないが、あまり驚かない。

「はやて、気付いていたのか？」
「いや、ただなんとなーくで。」
勘がいいようだ。
「それで、どうしてそれ…、アステリウスを手に入れたん？」
「それは、１０年以上前にさかのぼるな。」
俺は昔話をした。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「異世界の遺跡調査…？」
「あぁ、そうだ。」
「ふーん。」
俺はクロノの指示で遺跡調査に出向く羽目に。
「しかし、なんでまた俺なんかに？」
「君が僕のパートナーだからだ。」
「なった覚えは無いが…。」
「とにかく準備しとけよ。」
「ハイハイ…。」
当時（年齢７歳）の俺は、両親の事その他うんぬんのため、ハラオウン家に引き取られていた。その関係もあって俺は時空監理局の次元航行部にいるクロノ・ハラオウンの元で働いていた。
「ま、しゃーないか…。」
俺は出発の準備を始めた。
ちなみにこの時は専用デバイスを持ってない。
「だいたい、こんなもんか…。」
準備終了。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
［艦長、全員の準備が終わりました。］
「わかったわ。それではアースラの中で待機させて。」
［わかりました。］
クロノからの通信を切り

「さて、私も。」
艦長のリンディ・ハラオウンもアースラに向かう最中。
「あっ、艦長。」
「あら、エイミィ。」
「今からですか？」
「えぇ。」
とまぁ、アースラクルー全員が艦内に集合したのは、１０分後だった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
アースラが本局をでて約１時間後、目的地に到着。
「これは…。」
「荒いな、こりゃ…。」
目の前には必要以上に壊れた遺跡の門があった。
「行こう。」
「了解。」
遺跡に向かって歩き出したその時
＞会えた。＜
「！？」
クロノはクラウドを追いかけた。
「おい、クラウド！」
だが、俺は答えない。
こうして、少し走ると中心に何かを置く台がある、小さなひとつの部屋が見えた。
「ここは…？」
「うっ…、なっ…、なんだここ！？」
「君が走ってここに来たんじゃないか？」
「いや…、俺じゃない。」
そう、俺は走ってない。どちらかと言うと…。
「どっちかつーと、体が勝手に動いた。」
「そんなバカな…。いや…。」

よくよく考えればあの時のクラウドの瞳は違っていた…。
「貴方を待ってました…。」
「「誰だ！？」」
声がする方を見ると、そこには光輝く少女（見た目、小学1年生）がいた。
「私の名前はアリーです。クラウド・アユトーレさん、私は貴方を待ってました。」
「待っていた…？どういう意味だ？　だいたい何故俺の名前を知っている？」
俺は、アリーと名のるその少女を睨みながら尋ねた。
「貴方はこの世界で唯一、この蒼銀の剣を扱う事が出来る人間です。」
「蒼銀の剣？」
「はい。この指輪です。」
そう言って台の上の小さな指輪を見せた。
「…。」
「これが蒼銀の剣です。」
「…。」
さっきから俺とクロノは黙っている。
「この蒼銀の剣は、扱える人間がこの遺跡に入った時点で輝きます。そして、今その輝きは最高値です。」
「つまり、俺が近づいたからこうなったと？」
「はい。それに、私の干渉を受けたのは貴方だけです。」
「それで俺の体は…。」
よくみると彼女の瞳は、さっきのクラウドの瞳と同じ色だ。
「貴方の名前を知ってる理由は…。」
「何なんだ？」
一回深呼吸してから彼女は答えた。
・・
「私達が貴方の父、レオン・アユトーレ氏によって産み出されたか

らです。」
「何！？」
俺は訳が解らなかった。何故ここで殺された父の名前が出るのか。
「何故…、何故、父さんの名前が出てくる！」
言葉を荒くして聞いた。
「貴方の父…。いや、ご両親は私達のような精神体の研究をしてたから…。」
「もういい！！」
俺は強引に話を止めた。これ以上聞きたくなかったから。
「アリー…、だったな。」
「はい。」
「その指輪、俺を認めてるんだな？」
「クラウド！」
「彼女が父さんに産み出されたなら、俺にはいろいろと責任がある。」
「だが！」
「宜しいのですか？これを受け入れると言う事は貴方と私は共生する事を意味しますよ。」
「共生？」
「はい。私達精神体は、意識だけの存在。だから…。」
「宿る場所が必要だと。」
「はい。」
「いいのか？クラウド。」
「さっき行ったろ。責任があるって。それに聞きたいこともあるし。」
今思えば、俺はこの時からいろいろ覚悟を決めてたのかもしれない。
「それなら私の後に続けてください。」
「あぁ。」
俺とアリーの回りに魔方陣が現れた。
「我、汝に力を与える者。」

「我、汝に力を与える者。」
「蒼銀輝きし剣の契約の元にこれを認めよ。」
「蒼銀輝きし剣の契約の元にこれを認めよ。」
「これを護りし我は。」
「これを護りし我は。」
「聖なる心と暗黒の力を持ちし者なり。」
「聖なる心と暗黒の力を持ちし者なり。」
「「貫け覇道！」」
「「ルミナス・アーク／アステリウス、アクセル・オン！！」」
俺とアリーが唱え終えた瞬間、
魔方陣の輝きが増し、２人を呑み込んだ。
「うっ！？」
数秒後に輝きは弱まり、２人いるはずが俺１人になっていた。
「クラウド、彼女は？」
「俺の中だ。」
＞クロノさん、聞こえますか？＜
「念話で話すのか。」
＞はい。それとクラウドさん。＜
＞クラウドでいい。＜
＞クラウ…ド…、貴方が持ってるその宝石、それはルミナス・アーク。貴方のデバイスです。＜
「これが…。」
＞詳しくは戻ってからですね。＜
「とりあえず、皆と合流しよう。」
「あ、あぁ。」
こうして俺達は他の調査メンバーと合流し、調査を終了。本局に戻った。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＞なるほど…。つまり、お前は父さんによって見つけられた訳か。＜
＞はい、ただ…。＜

＞どうした？＜
＞もう１人いるんです。私と一緒に貴方の父に見つけられた精神体は。＜
現状整理
蒼銀の剣はロストロギアで、父さんによって見つけられその時に蒼銀の剣に宿っていたのがアリーともう１人。そのもう１人は行方不明らしい。
そして、蒼銀の剣が俺の力になったためアリーは俺に宿った。
アステリウスの力を開放するには、指輪の輪にルミナスを嵌め込まなければいけない。
ちなみに、蒼銀の剣はルミナスとアステリウスの２つをまとめて言う。
こんな感じ。
＞それで…、もう１人。トーマを探してくれますか？＜
涙声で頼まれた。
＞任せろ。＜
＞ありがとうございます♪＜
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
翌日が休暇だったために、トーマを探している。
「ここだな。」
ルミナスが教えてくれる。
「Ｙｅｓ．」
「よし。」
俺はミッドの外れにある森の中の遺跡に入った。
＞トーマ！帰ってきて！！＜
俺の中でアリーが呼び続けながら、奥に進んだ。
「なんで別れたんだ？」
＞それは…。＜
と言ってると、いかにもみたいな場所についた。
「行くっきゃないか。」

俺は扉を開けた。すると
「誰だ？」
1人の男がいた。
「トーマだな。」
「？　剣の力を得た人間か…。」
「その通りだ。」
首からかけた指輪を見せて言った。
「なら話は早いな。俺と契約しに来たんだろ？」
「あぁ。」
やけに冷静だな。
アリーの時と同様に魔方陣が現れた。
やることは一緒なので略す。
帰り道。
＞これで問題なくいけたな。＜
「どう言う意味だ？」
＞俺がアリーと離れてた訳だ。精神体との共生は大きな負担をかける行動だ。まして2人もいるのはどうかしてる。＜
「まさか…。」
＞そうだ。一度に2人と共生するとまずいし、充分な休息をとらずにやるのも危険だ。だから離れたんだ。＜
「アリーには知らせずにか。」
＞酷いよ、トーマ。＜
＞まぁ、こんな2人だが宜しくだ。えーと…。＜
「クラウドだ。クラウド・アユトーレ。」
＞宜しくだ。クラウド。＜
さて、帰ったらクロノ達に言わねーとな。今日の事。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「うんな経緯で、今の俺達がいる。」
「その蒼銀の剣がロストロギアと言うならいいの？」
「あぁ、こいつの力か。こいつはファントムコア同様、人の思考に

干渉する物だ。」
「それじゃあ…。」
「心配すんな。こいつが悪い意味でロストロギアの力を発動するのは無いから。封印しているし。」
「だと良いけど…。」
「1つえぇか？」
「構わないが…。」
「アユトーレはいつから名のるようになったの？」
そこ！？
「いつだっけ？」
＞確か、俺達が共生してから…。＜
＞2週間後じゃない？＜
「共生してから約2週間後ぐらい。」
「そうか。」
「まったく関係ねー。」
ひとまず俺達の説明終了。
「最後は…、なのはの事だな。」
一番重要な所にはいった
「なのはが拐われた理由は…。」
一呼吸おいた。
「解らない…。」
「えっ？」
クラウドの口から予想外な言葉が出てきた。
「理由が解らない…。」
「それは…。」
「なのはを狙ったのか、俺達を引きずり出す為の餌なのか…。」
「なのはを狙ったとしたら、なにが目的なのか解る？」
「それは多分、巫女の力だと思う。」
「巫女？」
当然皆（クロノ達含む）？マーク。

「巫女の力は、僕やクロノ、フェイト、そしてなのはのようにミッドチルダ式の魔法を使う人間にのみ、発動する力なんだ。」
「ユーノ？」
「クラウドに頼まれたんだ。」
ユーノは説明を続けた。
「巫女の力は、発動させた人間の魔力値や戦闘能力を飛躍的に強化する力で、この全世界のミッド式を使う全ての魔導士の内、たった1人だけに与えられる力。そして、巫女の力を受け継いだ人間が死んだとき、別のミッド式の魔導士1人に受け継がれる。」
「しかも、発動しない時もある。受け継いだ人間が、守りたい。とか、助けたい。とかの強い思いに反応して発動する力だけど。」
「…。」
皆がシーンとしてる時に、タイミング悪く
「はーい♪おひさー♪」
エイミィ・ハラオウンが到着した。
「…。」
「…。」
「…。」
「…。」
「…。」
「あ…、ごめんなさい…。」
「いや…、タイミングが悪かっただけだ。」
さすが夫。フォローが早い！
「エイミィ、なんで？」
「クロノくんと母さんに呼び出されてね。おっ、クラウドくん久々だねぇ♪」
「は…、はい。」
「まぁ、明るく行こうとしても難しいな～…。事が事だしね。」
どうやら話を聞いて飛んできたらしい。
「話を戻すが、もしこの力が目当てなら俺達3人じゃ無理だ。なの

はを助けられない。だから…、力を貸してくれ。頼む！」
俺は深くお辞儀をした。
「何改まってんだ？」
「絶対に助け出すんや！」
「我ら守護騎士も同じです。」
「なのはを助けよう。皆で！」
皆の声に勇気付けられた気がした。
「あぁ。そうだな！」
「あと、これ。」
そう言って、フェイトが近付いてきてポケットから何かを取り出した。
「これは…。」
「返してあげて、なのはに。」
「あいつ…。」
フェイトから受け取ったのは、赤い宝石。レイジングハートだった。
「なの…は…。」
悔し涙が流れかけた。
「大丈夫。」
「フェイト…。」
「前とは違う。私達もいる！だから大丈夫！」
「あ、あぁ。」
フェイトに励まされた。
＞今度はヘマはしない！＜
＞絶対に助けよう。＜
「あぁ！」
全員が同じ気持ちで意気込んだ。

第１３話　明かされる真実（後書き）

えらくすっぽかしました。
すいません。今回は謝罪の言葉だけにさせていただきます。

次回から決戦に突入します。

お知らせ（前書き）

お知らせです…。と言うよりは謝罪です…。

申し訳ありません。

お知らせ

この「魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ」を読んでくださっている皆さまにお知らせします。
一度、本編全てを削除し書き直す事に致しました。
内容は変えずにより解りやすいような書き方にに変えていくように努力していくつもりです。
これまで読んでくださった皆さまに感謝すると同時に迷惑をお掛けします無礼をお許し下さい。
話が解っている皆さまはつまらないでしょうし、クレーム等あるでしょう。
ですがどうかこれからも、「魔法少女リリカルなのは　ＴｒｉＡｃｃｅｌ」を宜しくお願い致します。

お知らせ（後書き）

本文に書きましたように努力していきます。
皆さま、どうかよろしくお願い致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8194r/

魔法少女リリカルなのは TriAccel

2011年10月8日22時27分発行